

悲しみに寄り添う 臨床宗教師養成

534
30他

宗教や宗派を超えて宗教者が心のケアに取り組む「臨床宗教師」の研修が、今春から龍谷大で始まった。大きな喪失感や悲しみに突然見舞われた人を前にした時、宗教者に何ができるのか。東日本大震災の被災者支援を契機に始まった取り組みが注目されている。

記念シンポジウム

4月24日、京都市下京区の同大学大宮学舎で開催された臨床宗教師研修の開設記念シンポジウムで、研究者らが口々に意義を語った。

「悲しみを乗り越える力」をテーマに話したのは、カトリックのシスター(修道女)として阪神大震災や東日本大震災、尼崎JR脱線事故でグループ(悲嘆)ケアに取り組んできた高木慶子・上智大グループケア研究所

特任所長だ。臨床宗教師が求められる背景について「人知や科学を駆使しても、人間は救われない、助けられない、支えきれないことに気付いた。甚大な被害と大きな犠牲、悲しみが人々に宗教を目覚めさせた」と、東日本大震災後に日本人の宗教観に変化があったと指摘。さらに「ケアにおいて、宗教者が自分の宗教の理論を語るだけでは行き詰まる。今を生きる力を共に見いだすことが、最も大切なこと」と話した。



臨床宗教師の可能性を話し合ったシンポジウム
(4月24日、京都市下京区・龍谷大大宮学舎)

今を生きる力、共に見いだす／多様な価値観で／自身の課題知る

研修の狙いは、異なる宗教宗派を理解し、尊重することを学ぶことにある。宗教者が相談者に自分の世界観や信仰を説くケースと、相談者の思いに耳を傾け、その世界観や信仰までを深く理解して心のケアに当たるケースとを区別しないと、単なる「信仰の押し付け」になるからだ。

いち早く臨床宗教師の養成を始めた東北大で研修を担当する谷山洋三准教授は、「多様な価値観を受け入れることが必要だ。そうすることで、受講した宗教者が自分の可能性に気付かされるはず」と期待を寄せる。

龍谷大の臨床宗教師研修では、東日本大震災の被災地や社会福祉施設での実習も予定する。鍋島直樹・龍谷大教授は「宗教者は立派な法話だけでなく、自分のことを深く振り返って確かめてはいない。研修では、自身自身の課題を知り、可能性を探す。受講するうえで、宗教者としての意識が変わるきっかけになれば」と話している。

(箕浦成克)

臨床宗教師 布教や伝道を目的とせず、宗教宗派を超えて、心のケアに取り組む宗教者のこと。2012年に東北大でプログラムが作られ、研修が始まった。欧米で病院や軍隊などの職場にいる聖職者「チャプレン」の日本版の養成を目指す。東北大と龍谷大は、1年間の研修を終えると「修了証」を出す。